

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 塩沢 一平

本論文は、『万葉集』第四期の歌人であり、最後の宮廷歌人とも評される田辺福麻呂の作品の特質を、その表現の具体的な分析を通じて明らかにしようとした論である。従来、福麻呂の作品は、柿本人麻呂、山部赤人などの先行歌人の糟粕を嘗めたに過ぎないとする評価が一般的であったが、本論文は、福麻呂が単なるエピゴーネンではなく、その作品にも独自の創意と工夫が見られることを丹念に指摘しており、これまでの福麻呂研究を大きく進展させるものとして、その内容は高く評価することができる。

本論文は、全四章十四節からなり、さらに全体の概要を述べた序章と今後の展望について記した終章とを付す。以下、本論文が明らかにしえた知見を、各章ごとに要約して示す。

第一章「田辺福麻呂の都城讃歌と荒都歌」は、卷六所収の「久邇京讃歌」「難波宮讃歌」「寧楽故郷歌」「久邇荒墟歌」を取り上げ、精緻な分析を加える。「新世」という表現が、「聖武朝・久邇京・橘諸兄政権」を象徴する頌詞として機能しており、そこに諸兄の進言を聞き入れて久邇京を建都した聖武の、いわば君臣の理想的空間への讃美が現れているとする。これまでにない新たな着眼点を示すものといえる。「久邇京讃歌」の二組の長反歌の対構造が、相互補完的であると同時に、六朝漢詩文の〈視聴対〉の発想の影響を受けているとする指摘も目新しい。「久邇荒墟歌」題詞の「春日」「悲傷」が、回帰する自然とその中での春愁を示し、それ自体が廢都への鎮めとなっているとする指摘も卓見であり、十分に説得的である。

第二章「田辺福麻呂の挽歌」は、卷九所収の「足柄の行路死人歌」「蘆屋処女歌」を取り上げて、その特質をあきらかにする。「足柄の行路死人歌」では、海の行路死人歌である調使首歌の用字・表現・構造を利用しつつ、「足柄坂」という、いわば山の行路死人歌に換骨奪胎が成し遂げられていることを指摘する。さらに、「蘆屋処女歌」では、山部赤人の「真間手児名歌」を摂取しつつも、そこに調和ある精緻な世界が作り出されていることを指摘する。二つの歌の価値を浮かび上がらせた点で、注目に値する論といえる。

第三章「田辺福麻呂の宮廷歌の周辺」は、福麻呂の「久邇京讃歌」の表現・構造の範となった柿本人麻呂の「石見相聞歌」を詳細に分析し、また卷十所収の七夕長歌が福麻呂作の可能性が高いことを論証したもの。とくに後者の説得性はきわめて高い。

第四章「和漢の双光」は、福麻呂の経歴を考察する中で、漢詩文世界との接触の様相をあきらかにし、「久邇京讃歌」が『文選』の都賦から着想を得ていることを指摘する。さらに、その二組の対表現に『淮南子』時則訓の「六合」の概念の影響が見られることを論じている。いずれも説得性の高い新見といえる。

以上のように、本論文は、従来、先行作の模倣が著しいとされ、目立った研究も乏しい田辺福麻呂の作品について、改めて立ち向かい、その詳しい分析によって、独自の表現の達成が見られることを明らかにしている。福麻呂には、ここで取り上げられなかった作品がなお存在し、その全貌を闡明するには不十分な点も残るが、本論文の内容は高く評価しうる。よって審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。